

エンカウンター (ENCOUNTER)

第234号

2021年10月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第1の手紙講解説教」より（4）

番茶・牛乳・肉の譬え

「兄弟たちよ。私はあなたがたには、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属するもの、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話した。あなた方に乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。」（コリント I 3・1-2）

霊の食物に乳と肉とあるのであります。それではいかなるものを乳と言い、如何なるものを堅い食物、肉と言うかにつきましては、…私はこう思います。例えば十字架の教えと言いましても、これをイエスが十字架にかかり、その自分の使命遂行のために十字架の死を遂げられ、その苦痛を味わわれた。その故に、我々も我々の人生において苦痛を辛抱するべきである、と。そういうふうな忍耐における手本として、これを説くというのは、これは十字架の教えでも、まだ牛乳にもならない番茶の教えであります。

しかし、十字架の意義を、イエス・キリストが我々人間の罪を救わんがため

に十字架に架かったのだと贖いの救いの意味として説くのは牛乳の教えであります。しかし、同じ贖いにしても、我々の救われるのは我々人間の行いでもなく、信仰でもなく、ひとえにイエス・キリストの十字架の贖いによるのだという説き方になってきますと、これは堅き食物になって来ます。同じ十字架の教えでも、番茶にもなるし、牛乳にもなるし、堅き肉にもなるのであります。…パウロは、君たちは生まれて牛乳を飲めるようになっておるけれども、牛乳ばかり飲んでいるのではないか、それでは駄目ではないか。もう少し早く肉を食べるようになれと言っています。…

パウロは3種類の人を頭に入れていています。未信者で全く肉的な者、霊を受けているが赤子の状態で、少しも進歩しない状態にある者、および、第3として成長しつつある霊の状態にある者であります。

神の同労者

わたしたちは神の同労者である。あなた方は神の畑であり、神の建物である。(コリント I 3・9)

9 節には、「私たちは神の同労者である」教師は神の同労者、神と共に働く者である。「あなたがたは、神の畑であり、神の建物である。」とっております。「同労者」という言葉は、新約聖書でここに 1 回出てくる言葉です。他にはありません。神と共に働く者。この意味については学者もはっきりしておりません。私は、天国においてパウロご自身から聞きたい一つの言葉と思っています。教会というものは神の園でありまして、その園の中に多くの園長がおります。パウロ有り、アポロあり。パウロという人はイエス・キリストの福音をよく分かっておりますけれど、アポロと言う人は福音をよく分かっていませんでした。これは番茶を飲ませた組であります。番茶は悪くありません。腸チフスでもいよいよ回復するという時期には番茶が必要です。番茶でなければならない。番茶を持って来る人、牛乳を持って来る人、肉を持って来る人、みんな、人を救いに導く神の召使として必要であります。従って、その召使を崇めたらいけないとパウロは言っています。皆召使ではないか。そういうものを見て、我はアポロ党、我はパウロ党と言っているのは、君らは育てたまう神が分かっていないからであるということであります。これが [3 章] 9 節までの大意であります。

天国ありと信じて歩め

本日の要点の第1は、霊的成長が必要であるということです。パウロは何時までも赤子でいてはいけないと言っておりますが、私はこの赤子から成長する唯一の道は、その霊によって歩むことにあると思います。聞いているだけでは何時までも赤子です。多くの信者は、聖書の勉強をしたり、あるいは神学をやって見たり、あるいは日曜日に出席して先生の説教を聞いているだけでしょう。真理に向かって歩んでいないでしょう。私はそう思います。赤子の間は何時までも肉の考え方が支配しています。しかし、我々が永遠の生命を教えられて天国ありと信じたら、天国ありと信じて歩む、天国を目当てとして歩む。その時にわれわれに霊的な力が加わってきます。歩むことです。一歩進めば一歩だけ成人します。

霊の成長

キリスト教の真理、霊的真理は外国語ですから、頭で覚えただけでは間に合いません。クリスチャンとはどういうものかという手本がありません。キリスト教の教師とはどんなものかという手本もない。パウロ先生のような先生はいません。今の日本にはこれが信者であるという人は見当たりません。キリスト教のことは知っているだけでは、信者とは言えません。人を許せないために、喧嘩ばかりしています。それは信者ではありません。霊的に成長しなければなりません。成長するにはどうしたらよいか。霊によって歩む。あるいは、我らは神の子だ、永遠の生命あり、天国に向かって、復活に向かって毎日歩んでいるのだと、これを毎日やることです。それを使うことです。諸君、これを使っていますか。使っていないでしょう。そのようでは、何十年やっても駄目です。ものになりません。ここには霊の成長ということが書いてある。

ここは贖いを説く

ここはイエス・キリストの贖いを説く。これは堅い食物です。肉です。初めての人にはこれは受けません。しかし、受ける人がいます。私は贖いを説く伝道師であります。他のことは説きません。他のことは他の所で聞いて下さい。そして、君たちにも分があります。その分を真剣にやって下さい。天国を目当てとしてやる。そうしたら我々の信仰が少しものを言って来るようになります。本当に自分の置かれたる仕事に対して自分の分、3の力の人は3を振り回して、真剣に仕事をしている人は少ない。給料が上がるためとか、人に褒められるためとか、何とかいうことでやっていますが、本当に自分の仕事をしている人を私はあまり見ません。朝起きて、あくびをして、仕方なく仕事に出かける。そんなことではだめです。

高円寺東教会の使命。当教会の使命は、イエス・キリストの贖いを説くことにあります。人間が救われるのは、人間の信仰によりません。人間の行いによりません。イエス・キリストの十字架の贖いによるということを説いています。かく理解することを「信仰によって救われる」と言う。小西芳之助の職分はそれだけです。そういうことを始めから死ぬまで説いています。君たちが信じる、信じないは僕は知りません。勝手にして下さい。僕はこのことを説く。これが当教会の使命であります。

ヤコブ書——わらの書か

「この土台の上に、誰かが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れて、それを明らかにし、またその火は、それぞれの仕事がどんなものであるかを、ためすであろう。」(コリント I 3・

12, 13)

我々はみんな建築士であります。キリストの土台の上にいろいろな家を建てます。我々一人一人が教会の建物の一部を建てています。建てるのに、金、銀、宝石、木、草、またはわらを用いています。ルッターは、この箇所を引いて、ヤコブ書を「わらの書」と言いました。私は、ルッターに賛成も反対もしない。それは、ヤコブ書だけを引き抜けば、「わらの書」と言えるかも知れない。それは、行いを強調しているからです。しかし、ヤコブ書を、聖書全体のあの位置において、即ち、4福音書を読みこなした後に出て来る書簡として見るならば、「わらの書」ではない、「金の書」と言ってもよい。聖書という者は、その場所において読む必要があります。ルッターは恐らく、ヤコブ書を強調せんがために「わらの書」と言ったのでしょう。この点については、天国で聞いてみたいと思います。

阪井徳太郎先生の残された事業

終わりの日に、わらで建てたものは焼かれてしまうが、金銀で建てたものは、残ると言っています。信者の行いについて注意した場所です。私は真理の御霊の含まれる量によって、わらや金銀に分かれるのだと思います。この考えは、オーガスチンの注釈と似ています。すなわち、金銀や宝石は、主イエス・キリストに関する事柄を指している。わらや草は、この世の事柄に関することであると言っています。この世に関することは、最後の審判の時には消えてしまい、金銀、宝石は残るというのであります。私のお世話になった同志会の創立者である阪井徳太郎先生は、90年間のご生涯の中で、明治、大正時代に、外交界、経済界で、実に大いなるお仕事をなされました。しかし、これらは、跡形もなくみんな消えました。そして、先生の事業として残っているのは、東大のキリスト教学生寮の同志会です。1902年に創立されたものが、今でも残り、いよいよ栄えています。最後の審判を待たなくても、50年間のうちに既に結果は現れていると言ってよい。従って、我々の建てるもの者、日々の務め、手に来る業に注意せよと言っているのであります。

あなた方は神の宮

あなた方は神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか。(コリント前3・16)

君達は、みんなで一緒になって唯一の大きな神の宮を構成していると言います。聖書には、各人が一つ一つの宮を構成しているという表現もありますので、一種のパラドックスと言えます。しかし、矛盾しているようであるが、そうではない。一人一人が神の宮であり、また同時に、一つの大きな神の宮を構成しているということでしょう。神の宮の中に聖霊が宿る。注解者は、異邦人の宮には偶像が祭られており、ユダヤ人の宮には、神の臨在というその印が祭られているが、キリストの教会には、神の霊自身が住み給うと言っています。誠に適切な説明と思います。この宮という字（原語でナオス）は「住む」という動詞から来ています。すなわち「神の宮」とは、神の霊が住み給うところを意味しています。私は米国の宣教しモーク先生の言葉を思い出す。新しい教会が出来上がったときに、彼女は、「神はセメントの中に住み給わない」と言われました。神が済み給うところが永遠に続くのであります。

第1の感想—イエス・キリスト賞

「救い」と「報酬」は別の事です。我々はイエス・キリストを信じ、イエス・キリストに頼る時に、救いにあずかる。何たる有難いことか。この「救い」にあずかった上で、我々は教会を建設することで、褒美を受ける。わらあるいは金銀相応で報酬を得るのであります。しかし、如何なる褒美であるかは書いていない。この世で偉大なこと、給料が上がることも褒美ですが、天国で与えられる褒美がどんなに素晴らしいものであるかは分かりません。オリンピックの金賞と比べ、「イエス・キリスト賞」というものはどういふものか、そのような褒美を目当てにする人が出てほしいと思います。

第2の感想—キリストを土台にする人

各人の働きが異なることです。牧師にもいろいろの程度があります。しかし、どの牧師も、信者一人一人に対して神からくる賜物を運ぶ小使いです。或る牧師は牛乳を、ある牧師は番茶を、ある牧師は肉を持って来る。しかしいずれも必要です。持って来るものが違うことを問題にするから、教会に分争が絶えないのであります。けんかするのは、イエス・キリストの土台が分かっていないからです。イエス・キリストの土台に完全にすべて乗っていれば、喧嘩のしようがないはずです。我は新教、旧教、無教会であると言って争っているのは、イエス・キリストの土台に乗っていない部分（半分）を持ち出しているからです。キリスト者は、往々にして傲慢で、変わった人間が多い。モーク先生のような謙遜な信者は本当に稀です。近く、モーク先生の本が出版されるのでよく読んで下さい。本当にキリストを土台にしている人に対しては、どの宗派の者も、仏教の人でも、頭が下がると思います。そういう人には力があります。

第3の感想—各自の責任の重さ

第3章8－13節には「各自」という字が4回も出てきます。各自の責任の重さが強調されている。この頃は、人が見ていなければ何をするか分からないという時代です。無宗教、無道德の時代です。我々の祖先は、こうではなかった。一人一人が自分のやったことに責任を負うことを学ぶべきです。何時か分からないが、聖書には、自分のしたことに対して、必ず報いのあることが書かれています。